

龍宮伝説——日中の水辺伝承の比較

高橋 康雄

一 「とこよのくに」としての龍宮

龍宮を理想郷とすることに異議は出ないだろう。忽然として開ける新世界の趣がここにある。日本の場合、龍宮という言葉が使われるのは時間の経過が必要であったが、それに代わるまでは「常世国」が古代以来、理想の国の代名詞のように使われていた。蓬萊山を「とこよのくに」と読んでいる。その主人公は浦嶋子、大亀に乗って「海に入る」のは龍宮城でなくて何であろう。『日本書紀』では「とこよのくに」となっているからそのまま受け取っておく。

秋七月に、丹波国の余社郡の管川の人瑞江浦嶋子、
舟に乗りて釣りす。遂に大亀を得たり。便に女に

化為る。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山に致りて、仙衆を歴り覩る。語は、別卷に在り。

『日本書紀』(3)

これは豊玉姫伝説にも通じる話であり、山幸彦が浦島の役目を担う。海神すなわちワタツミノ大神の姫であるトヨタマビメはワタツミの宮殿の乙姫。山幸彦はワタツミの宮殿すなわち龍宮へ行ったことになる。二人が結ばれたあと、トヨタマビメは山幸彦の国において出産することになるが、トヨタマビメは山幸彦に自分の本国の姿になって産むので出産の光景を見ないでほしいと言う。ところが、山幸彦はそれを覗いてしまう。すると、姫は八尋もある大鰐に化して這い回り身をくねらせていた。これは竜ではないが、類似の素材として見ることで

る。鰐を異婚による相手方の属性ないしは相手方のトータルを述べているとみることができだろう。山幸彦が宮殿から自国にもどるときに乗ったのは一尋鰐であった。鰐をサメと見る解釈もあるが、そのリアリティーはここでは問題ではない。必ずしも亀ではなくても類話として対比できるだろう。

いずれにしても古代以来、わが国には龍宮的な海神の存在を認める話型があったことを知ることができる。

二 中国の「沼神の手紙」と龍宮伝説

一九九九年十月、公務で中国湖南省の湖南大学を訪れたおり、汨羅^{べき}の川を車ごと渡しに乗って渡り、洞庭湖の君山という島に行くことができた。洞庭湖は日本の琵琶湖の六倍という大きな湖だが、海といったほうがいいだろう。訪問の直前に柳田国男の『遠野物語』のなかの「沼神の手紙」についていろいろ考察していたことと、あらかじめ、李朝威の『柳毅の物語』（六七八〜七八年の時代背景）を読んでいたこともあって、たっぷり一日がかりで行かなければならない君山への案内はまたとないプ



柳毅の物語を伝える竜宮への「入り口」の前に立つ筆者

レゼントであった。柳毅が龍宮へ入って行った井戸がそのまま残っていたのである（写真参照）。

『柳毅の物語』のあらすじを紹介しておく。

竜王の娘が結婚に失敗して羊飼いをしているところに通りかかった柳毅という書生が洞庭湖の竜王への手紙を預かる。南の岸の橘の太木を三度叩けば返事をする者があるという。羊を飼っているわけを聞くと、雨を降らせる神すなわち雷獣だという。果たして言われたとおりにすると、龍宮に案内された。

最後はお礼に宝物をもらって大変な金持ちになるのだが、結婚運がわるく、新しい嫁を世話される。その嫁が竜王の娘という結末になり、竜の寿命の一万年を半分ず

つにし、陸も水の中も自在に行けるようになる。不老不死に神仙の恵みを受けることになる。苦の種の尽きない人間界の克服をねらっており、また竜のような獣でも人を慕ったり、誠意をしめしたりすることを言いたいのだろう。不老不死は明らかに道教的な影響にある。湖南大学の周炎輝副院長によると、湖南では山奥から道教、中腹地帯では仏教、里にきて儒教という分布をしているという。

この物語のおしまいのほうに洞庭湖のはるかかなたに、あるはずのない山が現れる場面が出てくる。人間界をしのぐ調度を持った宮殿。その住人となった穀の語る言葉はますます奥深く、顔だちもますます若くなっていた。この湖に浮かぶ青い山には蓬萊山のイメージが感じられる。長沙からほど近い汨羅に身を投じた屈原の『楚辞』に「大亀が山を背負って手をたたく」とあるが、これは『列仙伝』にある大亀が蓬萊山を背負って手を打って滄海の中に戯れるの故事にも通じるものであり、柳の住む山の宮殿は龍宮と対になる蓬萊山という別天地を想像してよいように思う。崑崙山という想像上の山を国の中心のシンボルに据える中国なればこそユートピア思想

が柳の“幻の山”に託されていると指摘してもそうはズれることではないだろう。

『柳毅の物語』は龍宮伝説と同時に蓬萊山の仙人思想を二つながら伝えていることになる。

三 日本の「沼神の手紙」と龍宮伝説

柳田国男の『遠野物語』に採集されている「沼神の手紙」の伝承を紹介してみたい。

早池峯より出でて東北の方宮古の海に流れ入る川を閉伊川という。その流域はすなわち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今は池の端という家の先代の主人、宮古に行きて帰るき、この川の原台の淵というあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を托す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩けば宛名の人いで来べしとなり。この人請け合いはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部に行き逢えり。この手紙を開きよみて曰く、これを持ちて行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換えて取らずべしとて更に別の手紙を与

えたり。これを持ちて沼に行き教えのごとく手を叩きしに、果して若き女いでて手紙を受け取り、その礼なりとてきわめて小さき石臼をくれたり。米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。この宝物の力にてその家やや富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度にたくさん米をつかみ入れしかば、石臼はしきりに自ら回して、ついには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、小さき窪みの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えなくなりたり。その水溜りはのちに小さき池になりて、今も家の旁にあり。家の名を池の端というもその為なりという。〔二七〕

手紙を預かるという点、木を叩く、手を叩く点、沼が目的地という点、日中両伝説に共通の話題である。最後はなんらかの財宝が与えられる。臼、銭をひる独楽、尽きない財布、銭絹ぜにきぬ、小犬、黄金の馬などである。

関敬吾によると「わが国の伝承は西日本には極めて少なく、主として東北地方に多く、しかもほとんど伝説として伝承されている」(『日本昔話大成6』)ということだが、これは東北に鉱山が盛んだったことを示す。もたらされる財宝が黄金というのがなよりの証拠である。小犬の

場合も黄金をひることで同じことになる。秋田大学に全国にも珍しい鉱山学科があったのも地域性を裏付けるといえるだろう。蝦夷の時代に東北に巨大な産鉄ネットワークがあったことは多くの遺跡が物語るところである。

四 浦島太郎と龍宮童子の違い

日本では龍宮に案内するものとしていじめられた動物たちが救ってくれた恩人を背中に乗せていくという例話が少なくない。亀のほかには蛙や魚であったりもするが、亀の案内役は浦島太郎を乗せて渡るものとしてよく知られ、文学者たちの多くが浦島物語を作品化している。森鴎外はアーヴィングの「リップヴァン・ウィンクル」を「新浦島」と訳出して発表し、『山椒太夫』の安寿・厨子王の母を一年のうちに一気に老婆に変貌せしめて、この作品に浦島の境地を反映させている。

亀が登場する話は中国にもある。六朝時代の話とされるが、やはり、「沼神の手紙」の体裁をとる。敬伯という男が書簡をたずさえて伝令にたつ。日本の龍宮伝説の多

くが、花や薪を水に投げ込むことによって乙姫から感謝されて亀が龍宮に案内するといった展開をとるのだが、中国においても同様に樹の葉を取って水中に投げ込んで華麗な宮殿に案内される。ひとふりの刀を贈られ水厄をまぬがれる。洪水がおき、全村が水没したとき独り助かる。大きな亀が向こう岸に渡してくれたのであった。大水で困った男を助けてくれる亀が乙姫のところに手引きしてくれる龍宮伝説は日本にもあるが、この中国の伝承は『酉陽雜俎』（巻十四、五四五）に紹介されている。

どの浦島太郎も「開けるな」と言われた玉手箱を開けてしまうのだが、龍宮の三日が地上世界（娑婆）の三百年という例が多いようだ。永遠の生命を与えられていながら困ったことがあると、どうも手を出してしまうのが人情らしい。永遠の生命よりも目先の利得に走ってしまうものらしい。

龍宮童子の話は経済学という沈黙交易の時代の名残を伝えるものである。ポランニーの『経済と文明』におけるダホメにおける女奴隷一人に対して取り揃える商品の一例としてブランドー三樽（三オンス）、一二三ポンドの子安貝（三オンス）、ハンカチ布地二枚（一オンス）、プ

ラティル八枚（一オンス）、つまり合計八オンス分の金という数字をあげている。ダホメは砂金の産地であるというが、ここでは子安貝のほうが稀少価値を持っていた。これは日本の「炭焼藤太」（福島県福島市）の炭焼きの藤太が都から嫁をとって、嫁に預かった黄金を持って物を買に行くが、途中で鴨を見つけて投げつけてしまい鴨の「カモ」になってしまう。妻はびっくりするが、そんなもの裏山になんぼでもある、と言う。金などなんぼのものだというダホメの価値観とまったく重なる。

「沈黙交易は異人との交換行為」（栗本慎一郎『経済人類学』）というように共同体の外の共同体との交易であり、ある欲しい物があつたら自分の持っている別の物と取り替える用意があるということになるのだが、価値体系はあくまでも別であり、対価がどこに落ち着くかは定かではない。

宮沢賢治の作品のなかにわたしのお気に入り「祭の晩」というのがあるが、山の神の秋の祭りに大きな山の男らしい人物がまぎれこみ、団子を二串食べたあと、「早く銭を払え」と茶屋の主人にどやしつけられる光景が出てくる。山の男は「た、た、た、薪百把持って来てやる

を経て入ったものとみえ、沖縄、鹿児島の伝承に顕著である。『犬の婿入り』の伝承には、聖なる犬が、人間の生命にかかわるサチをもたらすという原始観念、これが底流にあったのである」(福田晃『伝承の「ふるさと」を歩く』)という指摘によると、犬のもたらす山の幸こそ自分たちの根源とみて、みずからの始祖にまつた華南の山岳地帯、ベトナム、ラオス、タイ、ビルマや苗族などの風習が北上して沖縄を中継基地として日本本土に伝わってきたのである。犬が産鉄にとって猫と同じく重要な役目を果たしているの、は北上する間に習合していったからであろう。

山の穴から理想郷が出現する話はそこが桃源郷として語られるところに共通する。陶淵明の『桃花源の記』には武陵の人というかたちで登場する漁夫が溪流に沿った道を行くと、桃の花の咲いている林にぶつかり、かぐわしい草が色鮮やかに美しく咲き乱れている模様が描かれる。林は川の源のところで終わっていた。そこに一つの山があった。山に小さな洞穴があり、そこをくぐり抜けると、急に開けて、平らな土地、家は整然とし、よい田地や美しい池、桑や竹などがあり、人びとはそれぞれに

楽しそうにしている。先祖たちが秦の時の戦乱を避けてここにやってきて、下界と隔たってしまったのだという。漁夫はすっかりもてなしを受けて帰途につくが、道道目印をつけて帰る。太守に一部始終を報告すると、太守は部下を派遣するのだが、迷ってしまっただけで、その後も訪ねようとする人がいるのだが、そこへたどり着いたものはない。それだけ俗界から隔たった理想の世界というイメージを陶淵明は描きたかったのだろう。俗界から洞穴をくぐってたどりつく桃花源は海中の龍宮や山の形をとる蓬莱山に通じるといってよい。

『遠野物語』には碗貸伝説のマヨイガ(六三)の話題が採集されているが、これも桃源郷の形態をとる。他者(異人)がお膳立てしてくれた財宝が用意されているという物語はやはり沈黙交易の残照といえるだろう。対価を支払わずにサチを恵んでくれることに素直に喜んでいるのである。

龍宮ではないが、水の底から水神が現れる水辺の伝説に「黄金の斧」という話型がある。イソップなどでよく知られるが、つぎの『遠野物語』にあるような形で各地で語られる。

その村の長者の奉公人、ある淵の上なる山にて伐るとて、斧を水中に取り落したり。主人の物なれば淵に入りてこれを探りしに、水の底に入るままに物音聞ゆ。これを求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘機を織りていたり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。〔五四〕

ある男が沼に斧を落として、途方に暮れていると、水神が黄金の斧を持ってきて「これか」と聞くと、違うという。さらに水中からその男のなくしたものと同じ斧を持ってくる。水神は正直者に黄金の斧もやるといふ。それを知った欲張りな男はマネをするが、黄金の斧をとろうとする。黄金の斧どころか、もとの斧まで返してもらえず、すごすごと帰途につく。一方の男は栄え、欲深の男は貧しくなるといふ話である。

こうしてみると、水辺物語にはサチを伴う話題が豊富であることが日中いずれにも明らかになった。沈黙交易から経済的交換の世界に入るにつれて、ケチとか欲とかが介入してきて「欲深爺さん・婆さん」の類が話題にのぼることがわかる。原型もしくは古い話型には素朴な贈与を払うほうに傾いているものが多く目につくはずであ

り、世知辛くなってきたときに欲目が表出されたにちがいないのである。

〔付記〕本稿は一九九九年十月、中国の湖南大学において小講演をした際の草稿を大幅に書き換えたものである。また洞庭湖にご案内いただき、多大なる啓発の機会をつくってくださった同大学の周炎輝副院長に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 『日本書紀』（3）、岩波文庫、一九九四年
- 李朝威『柳毅の物語』前野直彬訳『中国古典文学大集 六朝・唐・宋小説集第6巻』平凡社、一九五九年
- 『楚辞』《中国古典文学全集1 詩経・楚辞》目加田誠訳、平凡社、一九六〇年
- 『列仙伝』《鑑賞中国の古典第9巻 抱朴子・列仙伝》尾崎正治他編、角川書店、一九八八年
- 柳田国男『遠野物語』岩波文庫、一九七六年
- 『西陽雜俎3』今村与志雄訳、平凡社、一九八一年
- 関敬吾『日本昔話大成6』角川書店、一九七八年
- 炭焼藤太（野村純）編『日本伝説大系第三巻』みずうみ書房、一九八二年
- ポランニー『経済と文明』栗本慎一郎他訳、サイマル出版会、一九六六年

- 栗本慎一郎『経済人類学』東洋経済新報社、一九七九年
- 宮沢賢治「祭の晩」『宮沢賢治全集6』ちくま文庫、一九八六年
- 福田晃『伝承の「ふるさと」を歩く』おうふう、一九九七年

（メディア論・児童文化論／文化学部教授）